

<講演抄録>6. 局所発汗積算量測定による歯科治療時のストレス評価(第30回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	庄司 茂, 堀内 博
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	16
号	1
ページ	80-80
発行年	1997-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/31594

6. 局所発汗積算量測定による歯科治療時のストレス評価

庄司 茂, 堀内 博 (第一保存)

歯科治療時の患者のストレスは、切削そのもののみでなく、タービンやエンジンの音あるいは治療台に座ることによってさえも生じる。患者のストレスを減らすことは、治療を進める上で重要であるばかりでなく、歯科治療への恐怖を減らし、早期に受診するようになると考えられる。そこで、ストレスと特に関係の深い精神性発汗量を連続的に測定可能な局所発汗量連続記録装置 (スズケン社製, Kenz-Perspiro OSS-100) を用いて、歯科治療時および各種刺激負荷時の手掌部発汗量を測定し、この装置によるストレス測定の可能性について検討を加えた。

今回実験の目的を理解し協力してくれた医局員 8 名と歯科衛生士学生 3 名を被検者とした。測定は、1: 歯を切削中の測定, 2: 精神性負荷として引き算などの暗算を、身体性負荷としてハンドグリップや深呼吸を負荷中の測定, 3: 疼痛と精神性発汗の関係を見るために、電気的歯髄診断器を用いて測定した。

今回の被検者 11 名中、安定型は男性 3 名, 女性 3 名の合計 6 名で、動揺型は男性 1 名, 女性 4 名の合計 5 名とほぼ同数だった。

安定型では負荷間に強い相関が多く見られたものの、動揺型では強い相関はあまり認められなかった。

特に、疼痛負荷として今回用いた電気歯髄診断負荷と他の負荷との相関係数は、発汗基線安定型被検者で、歯髄負荷は他の精神性負荷や身体性負荷との間に強い相関が見られた。一方、発汗基線動揺型被検者では身体性負荷とは相関が見られたものの、精神性負荷とは相関は見られなかった。

今回の実験結果より、局所発汗連続記録装置 Kenz-Perspiro OSS-100 を用いることにより、歯科治療中に疼痛などによって生じる患者のストレスを測定できる可能性があることが判明した。

7. 矯正治療前後の咬頭嵌合状態と咀嚼機能の評価 — 感圧フィルム測定法および ATP 吸光度法を用いた横断的研究 —

御代田浩伸, 寶 広道, 菅原準二, 三谷英夫 (歯科矯正)

矯正治療の目的の 1 つとして緊密な咬頭嵌合および咀嚼機能の獲得が挙げられる。しかし、それらを定量的に評価した報告はきわめて少ない。本研究では感圧

フィルムおよび ATP 吸光度法を用いて、未治療の不正咬合者群 (17 名), 抜歯によって矯正治療を行った抜歯群 (18 名), 非抜歯治療群 (30 名), 正常咬合者群 (16 名) の 4 群における最大咬合力, 咬合接触面積, 咀嚼能力について比較検討を行った。なお研究対象者はすべて成人女性とした。その結果, 最大咬合力, 咬合接触面積に関しては正常咬合者群, 非抜歯群, 抜歯群, 不正咬合者群の順で大きな値を示す傾向が認められ, 不正咬合者群と正常咬合者群の間には有意な差が認められた。咀嚼能力に関しては抜歯群, 非抜歯群, 正常咬合者群の各群間には有意な差が認められなかったが, 不正咬合者群は他の群と比較して有意に低い値を示していた。

8. 下顎枝垂直骨切り術 (IVRO) 適用後の顎態の安定性

— 下顎枝矢状分割術 (SSRO) との比較 —

代元巳弥, 菅原準二, 三谷英夫 (歯科矯正), 長坂 浩, 川村 仁, 茂木克俊 (口腔外科 1)

外科的矯正治療の下顎骨に対する主な手術法として、下顎枝垂直骨切り術 (IVRO) と下顎枝矢状分割術 (SSRO) が挙げられる。本研究の目的は、骨片固定を行わない IVRO 適用例と、チタン・ミニプレート固定による SSRO 適用例の術後の顎骨および咬合の安定性を比較検討することである。研究対象は、いずれも下顎前突症で、IVRO を適用した 15 例, および SSRO を適用した 14 例である。研究資料としては、手術直前, 手術直後, ブラケット撤去時, 保定観察時に撮影した側面頭部 X 線規格写真を用い, FH 平面 (N 原点) を基準にして下顎骨の代表的計測点の XY 座標値の変化を観察した。その結果, 手術・顎間固定中は、上顎中切歯の切縁の位置に有意差が認められたが、術後矯正中, および保定観察期間中は、両群とも安定しており有意差も認められなかった。以上より, IVRO を適用した場合, SSRO と同様に優れた顎態の安定性が得られることが確認された。

9. 気管内挿管後に心室頻拍をきたした 1 症例

立浪康晴, 佐藤 実, 岩月尚文 (歯科麻酔科)

心室頻拍 (以下 VT) とは、ヒス束分岐より遠位の心室起源から発生した刺激により、3 拍以上連続して出現する不整脈である。血行動態に重要な影響を及ぼし、致命的なことが多いため緊急性が高い。今回われわれは気管内挿管直後に VT がみられた症例を経験した